

福澤における「謝恩」の一念

浅野 章

日本大学大学院総合社会情報研究科

An Idea of “Shaon” in FUKUZAWA

ASANO Akira

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

FUKUZAWA Yukichi (1835–1901) was known most widely known not only in the early Meiji era as a writer of *Gakumon no susume* (An Encouragement to Learning, 1872-6), but also as an author of *Seiyō jijō* (Conditions of the West, 1866) in the latest Tokugawa era throughout the country. He was an educator and advocator of enlightenment. *Fukuō hyakuwa* (1897) and *Fukuō hyakuyowa* (1901), written toward the end of his life, consisted of more than one hundred discourses, in which Fukuzawa discussed the question of the existence of Creator and whether we should have an idea of appreciation of Him or not. In conclusion he answered both of these questions in the negative. On a theory of the structure of gratitude this paper discusses these problems.

1. はじめに

平均余命の伸張に応じて百歳の人々の数もまた増加を示している。百歳を超えてなお元気に活躍している人をテレビは紹介している。しかし、死後百年を経てなお、単に人びとの記憶のなかに生きているというばかりではなく、現代においても取り沙汰されているばかりか、強い関心を持って顧みられ注目されているという例はそうざらにあるものではない。福澤諭吉（1835–1901、天保5–明治34）は類稀な一例であることに異論を挟むものはない。むしろ、このような紹介の仕方の拙劣さを指摘されるのが落ちというところであろう。最高の高額紙幣の肖像は、その国を特別の意味において象徴しているのであり、福澤は日本の顔として国内はもとより国外に向かってその表を向けていることになる。

福澤は存命中に如何に大きな影響を国民に与えていたか、取り立てて記すまでもなく多くの関連した史実の伝えるところである。

わが国の最大の啓蒙書の一つというより、発行部数において、また、及ぼした影響の大きさにおいて、

それらの比類のなさにおいて唯一¹といっても過言ではない書が。『学問のすゝめ』である。本書の愛読者であったある地方の一夫人が福澤の死を悼んで福澤家へ一文を寄せたという一挿話について、さる歴史学者が述べた感慨の中に端的に現れている。「綺羅星のように並ぶ明治の元勳の中でこのような例があったであらうか」と。この感慨の中には、朝野を挙げての福澤追悼の模様を容易に彷彿とせしめるものがある。

福澤晩年の心境を綴った『福翁百話』（1897）、（以下『百話』と略）と、『福翁百話餘話』（1901、明治34）、（以下『百余話』と略）は今日においても興味尽きない書である。

『百話』は、明治29年から翌年にかけて、福澤自身の経営する『時事新報』に掲載されたものであり、その後、記された十九話から成るのが『福翁百話餘話』である。当初ともに単行書として特に出版の意図はなく、前著は日頃書き溜めたものを子供達（四

¹ 幕末（慶應年）に出版された『西洋事情』がわが国初のベストセラーとしてもはやされたことは周知の通り。

男五女)に分け与えたものといわれているが²、後述の方は福澤の生涯を貫く信念の表白を、遺言として認めた趣の書となっている³。

『百話』は、第一話「宇宙」論、第二話「天工」、第三話「天工人に可なり」と配列されている。宇宙論から説き起こしてくるあたり、壮大な意図を持って筆を執ろうとしていた姿勢を窺わせる。事実、第二、第三話と話題が展開されると、福澤独自の人間論が次第にその全容を現してくる。

『百餘話』の方は『百話』で語り漏れた話題についてはもとより、これこそ福澤にとって、生涯をかけてのテーマである独立自尊について、当該主張者の見解を述べるというにとどまらず、並々ならぬ決意を披瀝して全稿の結び(十九)としている。

このように『福翁百話』、『福翁百餘話』は、福澤の宇宙論、自然観、人間論、倫理また政治論と、縦横自在に説き来たり説き去った小論集である。特に、早くから議論の対象とされていた福澤の宗教観は今日また新たな意義を持って見直すことが可能であるように思う

福澤の感謝についての論考すなわち福澤の感謝論について考えてみることにしたい。

2. 問題の提起

福澤はまた研究対象としても第一級の名に恥じない極めてユニークな人物である。

研究者をして押さえようとしても押さえきれず、追求の果てに、精根尽きて、とどの詰まり、遂に、その正体を見失ってしまうのが、落ちということになりかねない捉えどころのなさをもっている

言ってみれば、それは、研究意欲を掻き立てる興味ある対象であるとともに、魅力の赴くままに無自覚に取り掛かるととんだ迷路に迷い込まないとも限

² さる人から一文を所望されて福澤は子供達に与えている、と応え、『百話』の第六編を写し与えた。福澤論吉『福翁百話』「校訂後記」(昆野和七)、岩波文庫、273-4ページ。拙論で取り上げた第六話をなぜ筆写の労を厭わずに選択して書き送ったか、興味ある一挿話である。頒布については、同上、274ページ参照。

³ 福澤の生涯と思想の要約を知ろうと思えば『百餘話』を読むに如くはない。

らない、という戒めでもある⁴。

この戒めに留意して、考察を進めるようにしたい。感謝は宗教と深く関わっている。宗教に関する福澤の感謝論は『百話』の第六話として論考されている。考察に入る前に、研究方法として用いる感謝の構造の分析について述べておく。

3. 感謝の構造

感謝は一般に次のように形式化することが出来る。

《……が》《……について》《……に対して》《感謝》《する》。

この形式の意味については一見明白で説明の必要はないようであるが、必ずしもそうではない。感謝の現れ方の多様性がそれを暗に示しているといえよう。

1). 《……が》

《……が》、は、感謝の主体、すなわち、感謝するもの、感謝の念・気持ちを持っているものを示している。人間であることは、これまたあえて断るまでもないようであるが、説話文学などの世界に入ると、必ずしも人間にのみ限定することは出来ない。それらの主体は、たぶんに擬人化されているとはいえ、またそれ故にむしろ人間心理の隠された一面、あるいは、深奥の表出ということが出来るかもしれない。

2). 《……について》

《……について》、は、感謝の内容、すなわち、感謝の主体が、その故に感謝する、感謝の念を持つに至った理由、あるいは、感謝そのものを指している。

感謝そのものを指しているとは、その時、感謝は、全く《……》において無内容な空白、いわば、《……》に、感謝しているのであろうか。それは感謝といえるのであろうか。何事にも理由を見

⁴ 福澤研究者の異口同音に述懐するところである。そのことがまた研究の魅力ともなっている、‘思想史研究の醍醐味’とさえ洩らすものもある(坂本多加雄『新しい福沢論吉』、講談社現代新書、259ページ。大嶋仁『福沢論吉のすすめ』、新潮社、252ページ参照)。

出さねば納まらない人間にとっては解しがたいことであろうが、これが感謝の最高に位置する。ためにする感謝は、感謝の最低であり、感謝というより取引である、と厳しく批判される⁵。

《・・・・・・》について、は、一般には感謝の念の内容を意味している。

3). 《・・・・・・に対して》

《・・・・・・に対して》、は、感謝の対象、すなわち、感謝の内容を感謝する主体に与えた客体、を指し示す。感謝の対象あるいは感謝の客体は、感謝という現象を考える上でさまざまな問題を提起する。

感謝の主体が持っていたと同じような状況が見られるというより事情は複雑であるとも言えよう。特に、アニミズム的思想を持っている民族には、抵抗なく受け容れられる発想であっても、ユダヤ・キリスト教的一神教の雰囲気のある文化圏のものには奇異に映ることもある。ユダヤ・キリスト教の世界観から推して、《・・・・・・に対して》、は、神か、そうでなければ、人間に限定されている。言うまでもなくアニミズム的文化圏にあるものは、汎神論を、それと意識していないにしても、想念の根底に持っているので、感謝の対象あるいは客体に、人間に限定されることなく、ありとあらゆるものが感謝の対象あるいは客体となりうるのである。

4). 《感謝》

《感謝》、は、感謝の想念、すなわち、感謝の主体による、感謝の内容について、あるいは、感謝の客体について、さらに、感謝の内容と感謝の客体との結合、などについての心的活動を指す。感謝の意識なしに感謝はありえない。意識という精神作用の持つ問題を、感謝も持つところに感謝の複雑さがある。

5). 《する》

《する》、は、意識された感謝を実行に移す、その状態を指示する。感謝の実践である。

以上のように、感謝は形式的に構造分析される。

これまでの拙稿では、《感謝》、と、《する》、とを明確に分離することがなかった。すなわち、〈感謝する〉、と、考察されていた。しかし、なお。分析の必要上、今回のように、それぞれに考察の焦点を移すことによって、複雑な感謝の現象に、ある程度の考察の手掛かりが得られるものと考えている。感謝の想念すなわち単に感謝を意識していること、あるいは、感謝について考えていること、と、実行に移された感謝とは、状態において、また、価値において異なる。しかし、意識それ自体、あるいは、実践に関する問題、意識と実践との関わりなど多くの考察を要する。

感謝の構造を踏まえて、感謝の様相を、考えることが可能となる。

4. 感謝の様相

感謝の構造の分析のそれぞれに対応して感謝の様相を示す。

《・・・・・・》が、《・・・・・・》に対して。

いわゆる、感謝の主体と客体との関係において、感謝の主体とその主体を超越する存在者あるいは存在との関わりを言う場合、これを、超越的感謝と呼ぶことが出来よう。超越的感謝は、また、垂直の関係における感謝、と呼ぶことが出来よう。

超越的感謝が、感謝において縦の関係にあるのに対して、感謝の主体と客体が横の関係にある場合、これを、相互的感謝と称することが出来よう。相互的感謝が、感謝に置いて水平的関係にあることは、断るまでもない。相互的感謝は人間界において極めて日常的に見られる現象である。人間相互に見られる感謝である。感謝の本質に即してみると、また、感謝の現実を顧みると、人間同士の間相互的感謝は問題を孕んで現象している。その一端はすでに記してある⁶。

三番目に挙げることのできるのは、主体が人間であり、それに対して客体のほうは、他の生物、あるいは、物体、物質の場合である。

⁵ スピノザ『エチカ』島山尚志、岩波文庫(下)、86 ページ。盲目的欲望に支配される人の相互に示す感謝 (gratia) は取引(mercatura)あるいはは計略(aucupium)であるという。

SPINOZA OPERA II ,im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften hrg .von Karl Gebhardt Rep .C.Winter,1925,S.263-4

⁶ 同上(上)、249 ページ。
ibid.,S.200.

ここに見られる感謝の様相すなわち、感謝の主体と感謝の客体との関係のうちに、日本文化の一大特性を容易に読み取ることが出来るであろう。

感謝の様相について詳論するのは、本稿の趣旨ではない。二三触れておくが、その前に、感謝の本質について記しておきたい。

5. 感謝の本質

感謝とは、なされたことを知るにある。

本質とは、それを欠いては、そのものがあることも考えることもできないものであると、言われる。

なされたことがなければ、感謝の心の生じようがない。また、なされていても、これを知ることがなければ、やはり、感謝の思いをもつことは出来ない。感謝の本質は、感謝の定義を述べたものである。この点に関して、サンスクリット、パーリーの両語⁷は正鵠を射ている、と、言うより、まさに両語の訳義を記して本質としたのである。哲学書に見られる感謝の定義としては、「なされた好意に対して、なされたものが、これに報いようとする相手に対する愛である」⁸、を、挙げるができる。この定義ももちろん感謝の本質である「なされたことを知る」を含んでいる。人によっては、この方が、というのは、「好意」と明確に規定してあるので、感謝の定義に適していると見るであろう。事実、「なされた」、と、いっても、必ずしも好意からなされるとは限らず、また、「なされた」ために、とんだ災難、障害を被らないとも限らないからである。

感謝の本質、定義をめぐる問題についても、感謝の様相と同様、この場合は論考論述するには向かないので、単に、この問題は究極するところ、弁神論と深く関わる性格のものであり、同時にそれは、感謝の位相すなわち最深最高の感謝の考究に関わる問題である、と、いうことを指摘するにとどめておきたい。

目下のところ、感謝の様相の第三番目に挙げた、

人間を感謝の主体とし、他の生物あるいは物体もしくは物質を感謝の客体とする場合の関わりにおいて、一応わきまえておくべきこととして、感謝の本質である「なされたことを知る」において、重要な意味をもっている「知る」についていささか触れておく。

感謝の本質における「知る」は、観念としてただ知るというのではない。感謝についての常識としての知識は、言うまでもなく、人としての生育過程におい身に着けておかなければならない。まさに「なされたことを知る」感覚が、人が人として精神面においても成人の域に達した証として、一般に言われている社会人として、円滑な社会生活を送っていく上でことさら取り立てて言われたり言ったりする必要のない程度にまでその人のものになっていなければならない。

ここには、感謝の本質から必然的に感謝の重要な性格が導き出されている。感謝の応答的性格である。

6. 感謝の性格：応答性

人間は応答的存在である。人間の応答的性格は、人間存在の存在性格の根源に深く根ざしている。まさに、ハイデガーの指摘するように、人間存在(Dasein)は、被投性(Geworfenheit)において存在している⁹。人間存在は、根本において受動的である。何人も自己の意志でこの世に生を享けたものはいない。

享けるは受けるである。享受である。これは人間を外面からすなわち身体の側から見た場合であるが、内面においても、人間存在の受動的 성격が如何に深く強大なるものであるかは、人は感情の動物である、と言いつづねられているところによく表されている。

感謝は、もとより単なる受動にとどまるものではない。「なされた」ことを、「知る」、すなわち、受動から能動への転換を要する。ハイデガー的表現を持って現すことが許されるならば。被投的投企

⁷ サンスクリット語は krtajnā—krtavedin (田中美知太郎編『宗教と倫理』、人文書院、1977、369 ページ)。なお、パーリー語は、katanuun—katavendin (中村元『宗教と社会倫理』、岩波書店)。

⁸ Spinoza. ibid.

⁹ Heidegger, M., §.58. Anrufverstehen und Schuld in : *Sein und Zeit*, ..Max Niemeyer Verlag. Halle a. d. S. 1935. S. 280ff. ハイデッガー『存在と時間』下巻、細谷貞雄、亀井裕、船橋弘共訳、理想社、88-104 ページ、参照。

(geworfener Entwurf) である¹⁰。

感謝における「知」の問題は、福澤の感謝論を理解するに当たって重要である。

7. 感謝の実践

《する》、すなわち、感謝の実践にもいささか触れておく。

英文で「感謝する」の一表現に、express thanks とあるように、感謝は何らかの形で外にあらわされねばならない。あるいは、自づから表出される。それが応答というものであろう。感謝の応答的性格を示す語「報謝」は好例である。今日もなお、「報恩」という語は、真宗における年中行事の最重要なるものの一つ、報恩講、として生きている。謝恩会の方は、辞書において命脈を保っているが、往年の面影を、少なくとも教育の現場においては、戦後消滅したと言っても過言ではないであろう。

「仰げば尊し我が師の恩」。師恩は、もと、仏教において、四恩の一つとして、重要視されている。仏教における恩の性格¹¹、主として、水平関係にあるよりも、垂直関係にある。敗戦後に徹底して進められた、民主化政策、民主化運動は、自由と平等を基本原理とするところより、縦の関係を重視する恩の思想とはなじまず、一時期、恩の観念は日本の社会の表層面から、完全に姿を消した。

教師の社会的位置にしても、「でも」「しか」教師、と自称他称し、教師・労働者論の主張において、戦前には見られなかった、教師像が出現すると共に、少なくとも、日本の近代まで、徳川幕府においてはもとより、明治、大正、昭和初期までに保持していた、当時の社会的ステータス(威光)を失うにいたった。

今日、謝恩に関する語で、日常、目にするのは、商業に関する催しにおいてであり、まさに通俗的感謝のもつ取引的性格を端的に示して余りあるものがある。

《する》、という、感謝の実践的契機は。そとに

¹⁰ *ibid.*, S.285. (Die Sorge – das Sein des Daseins besagt demnach als geworfener Entwurf: Das (nichtige) Grund=sein einer Nichtigkeit.)

感謝と無は深く関わる。

¹¹ 衆生の恩はその点、注目される。

形となって現れねばならない、と記した。このことについて一二付言しておく。

あえて外形的表出とした意味は、歌わぬ歌手、描かぬ画家が如何に大家名人を気取っていても、無意味であると同じように、実践を欠いた感謝は空名となるか、言い訳に過ぎないものととられよう。

確かに、感謝もまた、他の倫理的諸徳目のように、純粹さ、一途さを欠くと、ついには成立不可能に至る。カントの言う善意志は感謝においても固より生きている。しかし、内面にのみとどまり得ないもののあることをやはり、倫理という道徳行為において知らなければならない。反面、単なる外面的仕草、形式に流れがちである。

実践的表出は、場に即した雰囲気の影響を強く受けがちである。大勢に倣っていることが無難であるという心理と経験のしからしめるところである。如何に優れた倫理的行為であっても、大勢に抗して実行するとなると勇気を欠くことが出来ないといわれるのはこの間の事情を物語っている。さらに、倫理とは、もと、エトス(慣習)からエートスへと発展したものであり、これが事実を裏書していることは、現象としての倫理が、今日といえども時と共に変遷しているのを見るならば首肯されるであろう。

問題は、慣習は大勢のしからしめるところであり、これに対して倫理価値の高いあるものが、大勢によって軽視され無視される傾向にあるとき、如何に判断し行為するかということである¹²。

8. 福澤の感謝論 — 対造物主 —

福澤の感謝に関する論述は、先にも記したように、『福翁百話』の中に、第六話として掲載されている。「謝恩の一念發起すべきや否や」。この標題自体、福澤の思想における感謝の位置付けを端的に示して興

¹² 感謝における例として普段見られ物理物として、食事の作法を挙げることができるであろう。感謝の実践を考えるに当たって食事の作法はよい考察資料である。感謝と躰とは密接に関わる。家庭環境の反映である。さらに生育環境の影響でもある。宗教的雰囲気に育ったものはなんら抵抗なしに、食膳の祈りを行う。しかし、大勢すなわち雰囲気は大戸となると、抵抗を感じるであろう。ひとつのささやかながらも試金石である。五観の偈を誦している姿を公衆食堂において経験することは絶無といってよいであろう。信仰者あるいは修行者にとって、食前であればその場を問うべきではあるまい。

味深い。また、感謝のみにとどまらず、福澤思想すなわち福澤の思考の性格、福澤の考え方、ものの見方の根底を窺うことが出来るように思われる。

このような観点から、福澤の感謝論に入る前に、この標題自体の示している意義についていささか注目することとしたい。

感謝について、およそ現実の人間にとって感謝を全く欠いた生活というものを想像することは出来ないであろう。固より、何かの事情により、特殊な状況の下で生活を余儀なくされている場合、あるいは、好んで一般世間との交渉を絶ち、孤独の境涯にある人の場合にも、感謝との関わりはないとはいえない。感謝は必ずしも横の関係即ち人の社会的あり方において見られるものとは限らない。すでに指摘したように、縦における感謝もまた感謝として重要な意味をもっている。

感謝は意識現象であり、高度な精神現象であり、心的作用である。即ち、単に生まれたままの状態では発現せず、養育過程において習得していく¹³。躰と教育に加えて環境が決定的といってもよいほど重要な意味を持つ。

感謝は、人間に普遍的に見られる現象であり、深い意味をもっているに拘わらず、関心を、特に、学問的に抱かれることは稀であった。

福澤の「謝恩の一念發起すべきや否や」は、小論ながらまともに感謝をテーマとして考究している貴重な作品である。

福澤が、「謝恩の一念發起すべきや否や」と、問いを発している、その問いの向けられているのは、感謝における垂直的關係においてである。福澤の感謝の観念すなわち福澤の感謝一般に関する福澤自身の思考内容と感謝の構造との関係については、次節で扱うこととして、福澤の思想における感謝の位置付け、あるいは、『百話』における感謝の考察の占めている位置、について触れておく。

『百話』は、小論集ではあるが、「宇宙」(一)、「天工」(二)、と、考察の対象範囲を、宇宙論から始め、天地創造に及び、さらに、自然と人間との関わりに説き及ぶ、という壮大な意図のもとに、構想されて

いる思想書である。

『百話』の冒頭、「宇宙」において、福澤は、自己の宇宙観、人生観について、先ず明らかにし、次のように述べている。

宇宙は誰かに造られたものか、又は自然に出来たるものかとは、宗教論の喧しき所なれども、其議論は姑く擱き¹⁴、

と、一旦は宗教を離れるように見えて、直ちに宗教に戻ると共に、福澤自身の宗教観へと展開し、それに基づいて福澤の感謝論へと発展していく。

すなわち、

我輩においてはただいまの宇宙そのままを觀じてその美麗、廣大、その構造の緻密微妙なる、その約束の堅固不拔なるに感心するのみならず、これを思へば思ふほどいよいよますます際限なく唯獨り茫然として止むのみ¹⁵。

と、しながらも、超越的存在である神仏を否定する。

是に於いてか此廣大無邊なる有様を神の力と云ふもあり、如來の徳と云ふ者もあり、至極尤もなる次第にして、物の有様はありありと吾々人間の五感に觸れ精神に感じながら、その名なくしてははなはだ不都合なれども、左ればとて我輩は其神を知らずその如來をしらざれば、明かに神とも如來とも明言するを得ず¹⁶。

神仏に代えるに、福澤は天をもつてする。幼少のころより「人の力に叶はぬ事に逢へば天なり天道なりと言流し聞流した」習慣に従うまでで、適当な言葉があれば何と呼んでもよいとしている¹⁷。

問題は、宇宙と人間、あるいは、自然と人間との関わりについて、これを如何に解するかにある。

この問いについて考察しているのが、第三話「天道人に可なり」(三)である。

天道について、福澤は、「言流し聞流し」てきた単なる習慣による言葉に過ぎないとしているが、標題に表されている意味は深い。その意味からいうと、天道は福澤の思想を表す術語とみなしてもよさそうである。

¹⁴ 前出『百話』、17ページ。

¹⁵ 同上。

¹⁶ 同上。

¹⁷ 同上参照。

¹³ 感謝は本能か。これについては次回に譲りたい。

福澤によると、宇宙あるいは自然は、廣大無辺でありその大きさを計り知ることが出来ず、また、複雑微妙に構成されており、容易に人知をもって其機微を窺い知ることが出来ない。さらに、不思議としか言いようのない働き方をしている、唯茫然として自失するか、浅薄な人間の知恵をもって解してさえ感嘆させられるものがある。

宇宙あるいは自然すなわち天を、有らしめ運轉せしめているのは、天道であることが出来る。

天道は一体人間と如何に関わっているのであろうか。すなわち、天道は人間存在に対して、これを肯定するように働いているのか、あるいは、人間存在に対して否定的に作用しているのか。福澤は、この問いに対して、「天道人に可なり」、と肯定的に答えている。

福澤の論理の展開と肯定的結論は弁神論を思わせる。しかし、福澤は第六話に至ってこれを否定する。第六話は再三記している「謝恩の一念發起すべきや否や」を、題目にしており、第一話において提起され、第三話で展開された、超越者と人間との関係について、一つの結論を与えたものとして注目される。

固よりすでに第一話において、神仏を認めることはできないとしているが。上述のように、超越的なものとの関わりを具体的に論考した結論が、感謝に基づくものであるというところに大きな特色を認めることができる。

感謝に関する福澤の見解は、一応これを、前にも記したように、福澤の感謝論と呼ぶこととするが、その対象としているのは、超越的なもののみとは限らない。他の様相にも触れながら、感謝の構造の立場から、福澤の感謝論を見直してみることとする。

8. 福澤感謝論の構造

— 「謝恩の一念發起すべきや否や」に現れた感謝について —

先ず、福澤の感謝の定義について。福澤は、「抑も恩とは仁恵功德の義にして之を謝す」¹⁸、と、謝恩についてと、特に断ってはいないが、定義とみなして誤りのない叙述をして、謝す相手を、問うという

形で議論を展開している。

これを感謝の構造分析の立場から見るならば、何よりも、感謝がなされる理由が優先して、問われなければならない。次いで、何者が、何者に対して、。感謝として何をなしたかが問われる。以下これらについて考察を進める。

(1). 《・・・・・・について》

福澤は楽観的人生観、それも福澤の持論である肉体を根底に据えた幸福論を述べている。楽観的人生観は将来に向かって限らない幸福の追求となる。

ましてこの世は進歩改良の活劇場にして歩歩際限なしとあれば、假令ひ今日に不如意のこと大きも智徳の發達と共に前途の望みは円満にして、黄金世界の時代も期して空しからず。

まさに理想郷の実現に向かっている人類の、その過程にあるとはいえ、近々三四十年前には夢想もしなかつた文明開化の恩恵に浴している、この有り難さを、つまり、謝恩の一念を發起すべきであろうか。

ここに見られる感謝の契機は、幸福である。

その背景をなしているのは、壮大な宇宙論である。したがって、感謝の対象もまた宇宙の統括者・絶対者ということになる。

恩の定義を与えた後、恩恵功德を「施したる相手の所在なかる可らず」、と、廣大無辺の恩恵に謝する相手を求めて、論考を重ねている¹⁹。

(2). 《・・・・・・に対して》。

「謝恩の一念發起すべきや否や」。この問いは。問いとしての構造を完全に備えていない。言うまでもなく、誰が、誰にあるいは何に向かつて、何について、感謝つまり謝恩の一念を發起しなければいけないのか、しなくともよいのか、として、はじめて感謝についての問いとして、完全な問いとしての形態を備えた問いとなる。

福澤は意識的に、問いの構造のほとんどの契機を欠いた問いを發したのであるだろうか。この問いを呼び起したのが、《・・・・・・に対して》、という感謝

¹⁸ 前出『百話』、30-1 ページ。

¹⁹ 洗米中の女が無造作に米粒を流してゐるの見かけて大喝一声女を縮み上がらせた福澤の一面は、《・・・・》についての福澤の感謝観を知るが、むしろ日本人としては常識的な日常感覚であったとも言える（小泉信三『福澤論吉』、アテネ文庫、1948、6 ページ、参照）。

の構造の一契機である。福澤がこれを意識的に起こったことは、福澤自身が、恩の定義を与えた後、自づから問うていることから明らかである。この問いの展開が第六の主要な内容をなしていることと相まって、著しく宗教的色彩を帯びていると、いうより福澤の宗教論といって過言でない印象を、第六話は与えるのである。

すなわち、《・・・・・・に対して》、に即してみるならば、垂直関係における感謝を、福澤は否定した。これは啓蒙思想家としての福澤の面目を示すものであるが、福澤の生来の性格、また、成育環境をも暗に物語っている。この感謝における構造契機は感謝の様相として、垂直関係と共に水平関係も研究対象としている。福澤の場合、水平関係における感謝も重要である。後に触れる機会があるであろう。

ここでは福澤が感謝の様相として垂直関係における感謝を否定した点を踏まえておきたい²⁰。

《・・・・・・に対して》、と、感謝の客体が問われれば、主体も必然的に問題として浮上してくる。

(3). 《・・・・・・が》、について

感謝の主体については、あまり問題はなさそうであるが、第六話を、この点に注目して一瞥しただけで、簡単に扱えないもののあるのに気づくであろう。

まず、誰が感謝しようとしているのであろうか。

つまり、誰が恩恵を受けているのであろうか。先に引用した福澤の言葉によれば、「人間の快樂」について、福澤は積極的にこれを肯定し、「肉体を養ふ可し、精神を樂しましむ可し」としている。この限りにおいては、感謝の主体は人間一般あるいは人類ということになる。事実、人間に生まれたことに感謝すべきであるという言葉について、「無形の流言」であり聞くに堪えないと、感謝における人身享受説とも言うべきものを福澤は一蹴している²¹。

ここにおいは、感謝における垂直関係において主体となっているのが人間であったが。次いで、「吾々

は此大幸福に浴する身分なりと雖も、進んで其恩を謝す可きや否や」と、吾々が、主体となっている。もとより、人間一般も吾々である。この場合は、より限定された、読者に呼びかける立場からの発想であり、人間一般について論じていた際とは異なる。著者と読者との共同思考を促すものであることを、第六話は標題において先ず提示している。その意味からいうと。ここに示されている吾々こそ第六話全体の、《・・・・・・が》。に相当する感謝の主体ということになる。断るまでもなく「吾々は・・・・・・謝すべきや否や」と本文中に明記されており、今更の感を持つかもしれない。確かに、提示した疑問(命題一謝恩の一念發起すべし)に、否定的結論を導くには、読者の共感を得ながら、論理の展開を図っていかねばならない²²、そのためには、著者と読者とが一体となって思考することが要請される。哲学書であれば普通に見られることである。『百話』のみならず、哲学あるいは思想などという語は用いていないが。福澤の著作には少なからず此の姿勢が認められるのも、啓蒙主義者、教育者として傑出していた福澤の一面を物語るものであろう²³。それはさておき、第六話における感謝の主体は、吾々すなわち著者と読者によって形成される一団あるいは層に限定されるのであろうか。福澤の感謝論は更なる広がりを見せる。

謝恩の一念は、宇宙論から天道論を経て論じられてきた過程にあるのであり、その性格からして宗教性を帯びていたというより、まぎれもなく宗教論である。結論は神仏に対する感謝の否定である。

吾々は福澤の論理に導かれて神仏への感謝を否定した。それは、福澤の宗教観と徹底した思索に基づくものである。要約すると、神仏すなわち超越者を経験したことがないということと、永遠無限な絶対者を第一原因として理論的にも確定することは不可能である、ということである。もっとも福澤の宗教

²⁰ 垂直関係についてはなお問題はあある。先陣の功績、祖先の威徳を福澤積極的に評価している。

²¹ 前出『百話』、32 ページ。なお三歸依文は次の通り。

「人身享け難し今既に是を受く、仏法聴き難し今既に是を聞く。此の身今生に向って度せずんば何れの生に向かつてか此の身を度せん」。

²² 「共感」は、福澤において重要な概念である。福澤が特にこの点を取りあげて論じているわけではないが、議論の根據に是を置いていることは、何より、交際、演説を重視した点によく現れている。

²³ 実学を重んじた福澤は哲学を哲学として論ずることは、抽象的概念の遊戯として好まなかったとも見られる。

観は以上に尽きるものではなく、無限に進歩して止まない人類は究極には完成された存在者に達することが期待される、そこに至る過程に現在の人間はある、宗教はその人類進歩の一過程に見られる現象に過ぎない、知徳が進めば宗教は無用となる。

このように述べると、福澤は宗教を軽視しているように見えるかもしれない。

ところが、福澤は宗教の重要性を説いて止まない。

その端的な一例が、当面問題としている『百話』中の第六話において、まさに、感謝の分析を通して、それがいかなる性格を持ったものであるのか、窺い知ることが出来る。すなわち、

(4). «……が», について改めて問われる。

福澤は、経験的にまた理論的に神仏の存在を否定したが、いわゆる半解と福澤が呼んでいるものによって、福澤の思想を軽率に解され、「人間世界に神も佛もなし報恩禮拜一切無用なりと早合点し、未だ修身開智の要を得ずして早く既に横着者となり、以て世安を害するの憂なしとせず」²⁴、として、福澤の主張を曲解されることを恐れた。第六話の本文に直接して括弧つきで付言した趣旨はこのような憂いが無宗教不信心を原因として驕慢な心を生じその結果世上の不安を招き騒乱が現実化するにある。

福澤の宗教に対する期待は並々ならぬものがある。このことは福澤の、特に後半生の著述に一貫して認めることのできる、福澤思想の大きな特色の一つである²⁵。期待されている対象としての、«……が», は、社会のいわゆる半解無知の大衆層である。

社会思想史的には周知の感謝の効用説である。

9. 福澤の宗教観と感謝

福澤自身における感謝は、人間相互に見られる«……に対し», が人間である、すなわち、感謝の様相としてこれを見るときは、主として水平関係にある。しかし、他においては、これを水平関係において見るには、それに先立って垂直関係においてあることを強調する。平たく言うなら、世人を

先ず宗教の世界に入れ、その効能をもって人間界を平安和楽にしようというのである。宗教の効能については統計上実証することが可能であり、その実施を施政者に勧めている。これなども、たとえ明治の人間といえども、またそれ故に際立って如何にも福澤ならではの説の展開と言えよう²⁶。

福澤においては、宗教と政治の関係は微妙なものがある。政教の分離を強硬に主張する一方、両者の密接な関連を説いてやまない。この点、政教は政治と宗教のみならず、政治と教育にも通ずる。これらは今後の課題として、宗教は『百話』において只今見た限りでは、神仏に対する報恩禮拜として端的に表明されている。この端的な表明なども、宗教の本質を的確に把握したものとして意義深い。その意義深さの上に立ってこれを否定したところに、更なる意義深さ、これこそまさに宗教の精髓とも言うべき問題域に立たしめるものがある。

宗教の本質を見抜いた。しかし、これをもって自らは宗教を否定した。だが、他においてはこれを肯定せざるを得なかった。

肯定するか、否定するか、宗教の根本問題がここにある。

経験においてまた論理において、福澤は神仏の存在を否定した。その帰結として必然的に創造者すなわち神仏に対する「謝恩」(報恩禮拜)の一念は否定されることとなる。

しかし他方において、専ら功利主義の立場より、要具としての宗教の絶大無比の効能ありとする見方から、福澤は宗教を肯定した。ここで留意すべきことは、単に理論としての功利主義ではなく、福澤にあつてはどこまでも現実が問題であり、現実における有効性が問われる。宗教の有効性については、福澤自身、もとより経験することはあり得なかった次第であるが、他者の体験あるいは、社会に及ぼす影響の素晴らしさについては、独自の広い見聞をもって、また豊かな学識により、確信していたものと思われる。

²⁴ 前出『百話』、33 ページ。

²⁵ 当然予想されるのは、日本における資本主義の発達に伴う貧富の差の拡大、労働争議の頻発による社会不安の増大と騒乱を鎮静せしめ和やかな世の中にしようとする宗教の効能である。宗教を巡って福澤評価の分かれるところでもある。

²⁶ 「宗教上に統計の必要(四月二十四日)」、『福澤全集第十四巻』、慶應義塾、1967、314 ページ。(明治三十三年『時事新報』掲載)。

そうでなければ、わが国第一の啓蒙主義者として定評のある人物が折に触れて宗教を強調して止まなかった理由を見出すことは出来ないであろう。まして実学の主張者として。

そこで問いはさらに一段の進展を見出す。

実効性のある宗教の核心とは何か、と言う問いである。

それに応えるのが、報恩礼拝である。既に明らかのように、報恩礼拝は、自づから生じ行為せしむるものとしての報恩礼拝であり、福澤自身にとってそれは不可能であった。しかし、頭の中では十分理解できるものであった。

ここにおいて宗教と無宗教との差異は歴然たるものがある。端的には信仰の有無である。

宗教は理知の関わるものではなく情意特に感情の奥深い世界に関わっている。もとより知情意の三者は峻別不可能である。事実として日常経験するところであり、先に記したハイデガーの説くところでもある。

三者の中あえて強調点を置くならば、知性と意志の能動性に対して感情の受動性の持つ特殊な性格に注目しなければならない。この点については、ハイデガーが現存在つまり人間の基礎分析において、それを被投性 *Geworfenheit* として重視しているのは感謝の考察にとっても重要な意味を持つ。

ここに、感謝の構造において感謝の性格が根本において受動的であると指摘した意味が思い起こされよう。

言うまでもなく感謝と宗教との深い関わりに触れるものである。

宗教的体験者のみがそれを知る。

10. むすび

『福翁百話』の第六話「謝恩の一念發起すべきや否や」に即して、感謝の構造分析により、検討を進めてきた。福澤がこの問いを発したのは、『百話』の構成の上からその位置づけを知ることが出来る。

『百話』は、宇宙論に端を発し、次いで造化の働きに及び、さらに人間論へと発展し、人間が恵まれた状態にあるにあること、しかし自らの努力にすべてが係っていることを省みて、自づから謝恩の一念

に想到し、これを表に現すべきが否か、と、という問いの開発を促したものと思う。

そこには福澤一人のみの持つ痛切な体験、幼少時に抱いた疑問と実証による確固たる信念、生来の気質と養育の環境、さらに青年時代における、近代文明の中枢である自然科学との接触と旺盛な攝取、また欧米における実地の見聞、もちろん先進的な書物による知識などにより、造物主（絶対者）に対する感謝の念を持たなければならないか、どうか、福澤にとっては深刻な問いとなって発せられた。確信を持って幼い日に神仏を否定した福澤にとっては、神仏（造物主）に対して報恩感謝の念を持つことは、まさに一念發起の一大決心を要する大問題であったに相違ない。それは自らの良心に関わり、理性上の歴然たる合理性に関わる深刻な問題でもあった。

福澤はこの問いを否定した。

この否定について、感謝の構造分析により不十分ながら一応の検討を試みた。

その際指摘したように、この問いの否定による社会的波及効果の、思いも因らぬ事態の発生を福澤は憂慮しないわけに行かなかった。それは日ごろ機会あるごとに筆舌によって強調してきた宗教に対する異常なまでの福澤の期待に背くものでもであった。明らかにこの矛盾が、『百話』の第六話に表出している。この矛盾について福澤宗教論の批判が噴出する。

なお、福澤の感謝に関する論考はこの第六話に尽きるのではなく、『百余話』における第十話「獨立の孝」に、福澤独自の感謝観に基づいて、極めて興味深く論じている。これについては次回に取り上げたいと思う。

(Received : September 30, 2006)

(Issued in internet Edition : November 1, 2006)